

アニメブームのメディア経験

——『機動戦士ガンダム』をめぐる放送格差と雑誌読者——

大東文化大学 近藤和都

【1. 目的】

『宇宙戦艦ヤマト』や『機動戦士ガンダム』といった人気を博したシリーズを背景に、1970年代から80年代にかけてアニメブームが起こり、社会におけるアニメとそのファンの存在感は大きく増した。だがここで注意したいのは、このブームに関与した「ファン」は一枚岩・均質的なものとしてあったのではなく、「放送」というメディアフローの制度を通じて時間・空間的に不均衡な仕方でも分節されていたということだ。当時、放送されるアニメ番組の種類と総数は地域ごとに異なっていた。たとえば、複数のテレビ局は『機動戦士ガンダム』を本放送終了後に放映し始めたため、その地域の人びとは「遅れて」アニメブームを推進した作品に接せざるをえなかった。他方で、彼ら／彼女らはアニメ視聴に「先立って」アニメ雑誌を通じて作品に関する知識を得ていた。この点を踏まえると、アニメ雑誌がアニメ文化に果たした作用について考察することの重要性が浮かび上がる。本報告は以上の問題関心から、1970－80年代初頭において雑誌メディアがアニメ文化に及ぼした作用について分析する。

【2. 方法】

考察に際しては、アニメブームを牽引したアニメ専門誌『アニメージュ』の投稿欄や記事上で言及された「時差」に関する記述を分析する。特に、『機動戦士ガンダム』に関連する記述を中心に上げる。『機動戦士ガンダム』は一時期『アニメージュ』の特集をほぼ独占するなど大人気を博し、雑誌とアニメの関係性を理解する上で最適な対象となると思われるからだ。分析の際には、(1) アニメ放送に遅れて雑誌が流通する地域、(2) アニメ放送に先立って雑誌が流通する地域、の違いを念頭に置く。そうすることで、雑誌経験とアニメ経験の節合関係がメディア流通の時間的差異に応じて変容する点を強調する。

【3. 結果】

(1) アニメ放送に遅れて雑誌が流通する地域に居住する人々は、アニメをめぐる様々な余白を埋め合わせるための素材として雑誌を活用していた。他方で(2) アニメ放送に先立って雑誌が流通する地域に居住する人々は、雑誌を介してアニメを擬制的に経験する作法を編み出し、それによって視聴していない番組であっても、それに関する雑誌上の投稿欄コミュニケーションにしばしば参加できた。また、事前に雑誌を介して番組の知識を得ることで、VHS出現移行に顕著となるような、物語展開や画面細部を過剰に読み込む視聴者性が形成された。くわえて、雑誌を介して番組の見所が共有されることで、それを「再放送」などの機会に視聴することを待ちわびる態度が促進された。

【4. 結論】

雑誌を介してアニメの視聴者性がメディア流通の地域ごとの時間的差異に応じて変容しつつ、全国的に標準化された視線が形成されていった。メディア文化を理解するには、メディア流通の不均衡さを念頭に置きつつ、その格差を埋め合わせるメディアのあり方や受容者の実践を分析する必要があるといえよう。